

原典で読む 外国人が見た日本

高橋知明

瀬田玉川神社禰宜

第十三回 『ニコライの見た幕末日本』

「日本国民はきわめて賢く、成熟しており、しかも新鮮な活力を持っている」



今回ご紹介するのは、幕末から明治の夜明けを経て日露戦争の後まで日本に留まり永眠したロシア人で、日本に正教（ギリシヤ正教）を伝道した大主教ニコライです。

彼は文久元年（一八六一）、箱館にあったロシア領事館附属礼拝堂の司祭として着任します。その後、明治五年（一八七二）にロシア公使館が東京に開設されると同時に東京に移り、日本においてキリスト教が、なぜこれまで普及することがなかったのか、その歴史的経緯や日本人が信奉する神道や仏教などの宗教についても研究し、日本に正教を伝道するために精力的かつねばり強く活動しました。

これまで紹介してきた外国人とはやや異

字の読み方を一通り覚えるだけでも、三、四年はたちまち経ってしまうというのに！それなのに日本人は、文字を習うに真に熱心である。この国を愚鈍と言うことができらるだろうか？」

では、なぜキリスト教はニコライの時代まで普及して来なかったのでしょうか。

彼は、西洋人とは違い、ロシア人で東方正教会（ギリシヤ正教）の立場から、客観的な視点で歴史を分析しています。これが興味深いので、紹介します。

西洋諸国は大航海時代以降の約四百年間、有色民族たる非西洋人は劣等人間として支配されるべきであり、異教徒はキリスト教の神の名においてその存在を許されないとし、非西洋人に対して、乱暴、不正、略奪、虐殺、隷属、侵略とあらゆる数々の許されざる悪行を働きました。

日本では織田信長の時代に西洋人が現れ、その後信長によりキリスト教の布教が許されます。武家社会を中心に次第にキリスト教信者が増える中、信長亡き後豊臣秀吉は、当初キリスト教を擁護しましたが、後に禁教します。その理由についてニコライはこう分析しています。

「炯眼の秀吉が、このヨーロッパの、とりわけイスパニアの政治の気運を察知しなかつたはずがあるか。そして、正しい判断

なり、彼の日本に対する評価は、全てが礼賛というものではありません。

特に神道については、

「この国の上層社会の無神論と下層社会の宗教に対する無関心とは、まぎれもなく、宗教の教義の貧弱さから来ている」

「このような宗教は、明らかに、文化程度のきわめて低い無知な民族にのみ認められるものである……自分に衝撃を与えるもの、驚嘆を呼び覚ますものならば何に対してもためらわず神として崇敬を捧げる、その程度の知的発達段階にある民族である」と語っています。

神職の私からすれば、日本人ほど信仰心の篤い民族はいないと感じています。教義



ニコライ

を下すことを怠ったはずがあるか」

「キリスト教はこの国にとって危険なものだと彼が考えたという以外に理由はありません。彼が必要としたのは本当は、キリスト教の追放ではなく、ヨーロッパ人の追放であったのだ。ヨーロッパ人と親密に交わることは止め、そうすることによってヨーロッパ人の貪欲な欲望から自国を守ることだった」

秀吉の目論見をよく理解していた徳川家康も、キリスト教を禁じ、のちに島原の乱に代表されるような悲劇も生まれます。

要するに、秀吉も家康も、キリスト教を禁教することで、西洋諸国からの侵略を防ぐことに努めようとしたのです。

そのことをよく理解したニコライは、日本の権力者たちは一方的にキリスト教徒を迫害したと言う西洋人を強く批判しました。むしろ彼は、「日本国民はきわめて賢く、成熟しており、しかも新鮮な活力を持っている」と見ており、西洋人のような邪な野心

がないということとは、裏を返せば言葉ではなく自然との共生という生活の中から学習するということでもあります。また日本人は当たり前のように、正月には神社にお参りし、お盆にはお寺にお墓参りに行くというように、外来の宗教でも長所を自分の生活習俗に上手に融合して信仰を篤くする、しなやかな気質を持っているというのが私の解釈ですが、ここで議論することではありませんね。

しかし、そんな彼でも日本について評価せざるを得なかった点に注目してみました。その一つは教育水準の高さです。ある貸本屋を覗いた時に、彼はこんなことを言っています。

「手垢に汚れぬまっさらの本など見当たらない。それどころか、本はどれも手擦れしてぼろぼろになっており、ページによっては何が書いてあるのか読みとれないほどのだ。日本の民衆が如何に本を読むかの明白なる証拠である」

またこんなことも言っています。

「読み書きができて本を読む人間の数においては、日本はヨーロッパ西部諸国のどの国にも退けを取らない。（ロシアについては言うも愚かだ！）日本の本は、最も幼稚な本でさえ、半分は漢字で書かれているのに、それでもなおかつそうなのである。漢

さえなければ、日本人はその柔軟性からキリスト教を受け入れるのではないかと普及に希望を見出しています。

「このように熱狂的なまでの性急さで外国のものなら何もかも丸暗記しようと思死になっっている人々が、キリスト教が妖術などでは全くなく、反政府の教えでもなく、他国を征服するための先兵でもなく、邪まな意図の全く無い精神的な教えであって、地上で唯一真正な宗教であるということをはっきり知るに、果して長く時を要するだろうか」と。

蛇足ですが、ロシア人である彼は日露戦争開戦前に、迷いながらも日本に残ることを決意します。日本政府は、正教徒とロシア人に危害がないよう身辺を擁護しましたが、彼らに対する国民の目は冷やかかなものでした。にもかかわらず彼は、日本人信徒を前にこう語りました。

「あなたがたは日本の勝利を祈り、而して戦いが勝ったならば感謝の祈禱を献じなさい」と。

日露戦争はロシアの侵略を阻止する祖国防衛戦争で、戦わずんば亡国あるのみというギリギリの戦いでした。自分の国を愛する心を持って、この難局を乗り越えたところに真の信仰が生まれると信じたに違いがありません。